

2013 年度 研究センター事業報告書

研究センター名	間文化現象学研究センター
研究センター長名	谷 徹

I. 研究成果の概要（公開項目）

本欄には、研究センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、研究センター5ヵ年計画に記載した内容に照らし、項目立てなどをおこなうことができるだけわかりやすく記述してください。

間文化現象学研究センターでは、科研費の支援を得て展開された5年間の活動を 2012 年度で終了し、2013 年度には、①これまでの活動で培った海外の研究者との連携や研究成果の発信をさらに継続・強化する諸活動を行なった。また、②2014 年度より新たな科研費(採択済み)の支援を得て行なわれる新たな展開の準備を整えた。具体的には、以下の活動を展開した。

【ワークショップ】

海外から当センターを訪問した若手研究者を迎えての新世代ワークショップ、および、韓国の研究者を招いてのワークショップを開催した。これによって、海外からの訪問客・招待客と当センターのメンバーとが交流を行ない、今後の協力関係を築くことができた。

1、新世代ワークショップ(2013 年 7 月 30 日、敬学館 237 教室、英語・ドイツ語)

ネイサン・フィリップス氏(アメリカ、シカゴ大学)「エトムント・フッサール『経験と判断』における同一性と差異性の根本形式」

池田裕輔氏(立命館大学)「超越論的仮象と現象学的逆説」

2、ワークショップ「生活世界と諸科学」(2014 年 3 月 15 日、末川記念会館第 2 会議室、英語)

キム・テヒ氏(韓国、建国大学校)「生活世界的時間の危機——E・フッサールの現象学的分析から——」

小林琢自氏(立命館大学)「尾高朝雄における現象学的国家論の展開」

【講演会】

本研究センターの独自規格として海外の研究者を招いて「間文化現象学研究会」を4回開催した。

1、ユリア・ヤンセン氏(アイルランド、ユニバーシティ・カレッジ・コーク准教授)講演会「カントとフッサール——超越論的哲学における想像力」(2013 年 5 月 10 日、学術館第 2 研究会室、英語)

2、ダン・ザハヴィ氏(デンマーク、コペンハーゲン大学教授)講演会「自己と他者 フッサールとメルロ＝ポンティ再考」(2013 年 5 月 24 日、末川記念会館第 3 会議室、英語)

3、カレル・ノヴォトニー氏(チェコ共和国、プラハ・カレル大学准教授)講演会「現象・主観性・身体性」(2013 年 7 月 8 日、学術館第 2 研究会室、英語)

4、ディディエ・フランク氏(日本学術振興会・外国人招聘研究者、パリ西大学ナンテール・ラ・デファンクス校教授)講演会「現前と非-現前」(2013 年 12 月 6 日、末川記念会館第 3 会議室、フランス語)

外国人招待客とは、2014 年度からの新たな研究展開を見据えて、今後の研究協力関係を築くことができた。

【研究支援】

メンバーの亀井大輔はフランスでのワークショップにて研究発表(フランス語)を行なった。同じく、佐藤勇一氏はフランスにてメルロ＝ポンティに関するワークショップに参加し、メルロ＝ポンティに関する資料を収集した。青柳雅文氏はアイルランドにてアドルノ学会に参加し、イギリスにてアドルノに関する資料調査を行なった。小林琢自氏は東京にて尾高朝雄に関する資料調査を行なった。

【研究の公表】

2011～12 年度の「成果報告書」を刊行した。単行本『間文化性の哲学』を刊行準備中である(再校入稿済)。

センター長の谷徹氏とメンバーの林芳紀氏は、それぞれ英語の共著書籍にて論文を公刊した。メンバーの青柳雅文氏と佐藤勇一氏は英語論文を国際誌に掲載した。これ以外にもメンバーによる活発な成果公表がなされた(詳細は別項に記す)。

II. 研究業績（公開項目）

本欄には、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。（2014年3月31日時点）

1. 著書							
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	その他編者・著者名	担当頁数
1	谷徹	Husserl's Ideen "Reading and Rereading the Ideen in Japan"	共著	2013年	Springer	Lester Embree, Thomas Nenon ed.	pp.19~33
2	Yoshinori Hayashi	The Future of Bioethics	共著	2014年3月	Oxford University Press	Akira Akabayashi ed.	pp.735-749, 766-773

2. 論文								
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	谷徹	「もの」と「かたり」の物語り	共著	2014年3月	『文明と哲学』第6号	野家啓一	pp.61~100	無
2	谷徹	文明・文化と「二」	単著	2014年3月	『文明と哲学』第6号		pp.31~45	無
3	Toru Tani	Fenomenologoziranje kulture (translated by Robert Simonic)	単著	2014年3月	Phainomena, XXII/86-87, November 2013		pp.61~71	無
4	谷徹	文明・文化と「一」	単著	2013年5月	『文明と哲学』第5号		pp.86~109	無
5	伊勢俊彦	存在することと表出されること--ヒュームの社会哲学と観念説の限界--	単著	2013年11月	『哲学論叢』40号		pp.12~23	有
6	亀井大輔	デリダの自己触発論の射程—ハイデガー、アンリとの対比をつうじて	単著	2013年5月	日本ミシェル・アンリ哲学会、『ミシェル・アンリ研究』第3号		pp.105~123	有
7	AOYAGI Masafumi	Phenomenological Antinomy and Holistic Idea — Adorno's Husserl-Studies and Influences from Cornelius	単著	2013年9月	INVESTIGACIONES FENOMENOLÓGICAS Monográfico 4/II		PP.23-38	有
8	佐藤勇一	言葉と沈黙—フランツ・ファノンをめぐる	単著	2013年5月	『文明と哲学』第5号		pp.161-174	有
9	佐藤勇一	人類学を通る還元の道—フッサールとレヴィ=ブリュル、メルロ=ポンティとレヴィ=ストロース—	単著	2013年6月	『多極化する現象学の新世代組織形成と連動した「間文化現象学」の研究 研究成果報告書(2011-2012年度)』		pp.155-169	無
10	Yuichi SATO	The Way of the Reduction via Anthropology: Husserl and Lévy-Bruhl, Merleau-Ponty and Lévi-Strauss	単著	2014年1月	Bulletin d'analyse phénoménologique X 1		pp.1-18	有
11	横田祐美子	存在そのものの暴力性—バタイユにおける実存と道徳—	単著	2014年2月	『立命館大学人文科学研究紀要』第103号		pp.167~181	有

3. 研究発表等					
No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名
1	Toru Tani	Utsushi, Shirushi and Mediation -- the philosophy of Sakabe Megumi --	2013年10月	SPEP 52 (52nd Meeting of the Society for Phenomenology and Exisistential Philosophy)	
3	加國尚志	「私は私に触れる」—マルブランシュ現象学：アンリとメルロ=ポンティの解釈を中心に	2013年9月	日仏哲学会 2013年秋季研究大会シンポジウム	
4	加國尚志	メルロ=ポンティとフロイト 1954-1955年講義「受動性」を中心に	2013年9月	日本メルロ=ポンティ・サークル第19回大会・シンポジウム「制度化と受動性」	
5	Toshihiko Ise	Generality and Partiality from a Humean Point of View	2013年8月	The 23rd World Congress of Philosophy	
6	林芳紀	予防接種の倫理的問題—医療従事者に対するインフルエンザワクチン接	2014年3月	SPH フォーラム 2014	

		種の義務化をめぐる議論を中心に			
7	林芳紀	医学研究者の追加的ケアの責務：治療／研究の二分法を超越する研究者の責務の基礎付けの試み	2013年12月	第34回日本臨床薬理学会総会	
8	林芳紀	新型インフルエンザ対策に伴う医療資源の配分の問題——パンデミックワクチンの優先順位	2013年9月	京都生命倫理研究会	
9	Daisuke Kamei	La démocratie et la question de l'autre chez Derrida et Rancière	2014年3月	Collège International de Philosophie, journée d'étude: La question de la démocratie : Derrida/Rancière	
10	亀井大輔	制度化の問題をめぐるメルロ＝ポンティとデリダ	2013年9月	日本メルロ＝ポンティ・サークル第19回大会・シンポジウム「制度化と受動性」	
11	小林琢自	Development of Otaka's Phenomenological Theory of the State.	2014年3月	間文化現象学プロジェクトワークショップ“The Lifeworld and Sciences”	
12	田邊正俊	ニーチェの「責任」観をめぐる一考察	2013年11月	関西倫理学会第66回大会	
13	池田裕輔	“Transzendentaler Schein und phänomenologische Paradoxien”	2013年7月	間文化現象学プロジェクト新世代ワークショップ	
14	池田裕輔	世界化と人間的主観性の逆説について	2013年11月	日本現象学会	
15	松田智裕	自己疎外の二つの位相——デリダの主観性理論に関する一視点——	2013年11月	関西倫理学会2013年度大会	
16	松田智裕	開かれていることの際限のなさ——デリダのフッサール解釈における「開放性」の問題——	2014年3月	日仏哲学会2014年春季研究大会	
17	横田祐美子	存在そのものの暴力性——バタイユにおける実存と道徳	2013年10月	暴力からの人間存在の回復研究会	
18	横田祐美子	バタイユ思想に倫理はあるのか	2014年3月	日本国際教養学会	
19	横田祐美子	知られざるものを知られざるままに——バタイユにおける非・知、思考の運動——	2014年3月	日仏哲学会2014年春季研究大会	

4. 主催したシンポジウム・研究会等

No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1	間文化現象学・新世代ワークショップ(ネイサン・フィリップ氏、池田裕輔氏)	立命館大学	2013年7月	20名程度	なし
2	間文化現象学ワークショップ“The Lifeworld and Sciences”(キム・テヒ氏、小林琢自氏)	立命館大学	2014年3月	15名程度	なし
3	間文化現象学講演会(ユリア・ヤンセン氏)	立命館大学	2013年5月	30名程度	なし
4	間文化現象学講演会(ダン・ザハヴィ氏)	立命館大学	2013年5月	60名程度	なし
5	間文化現象学講演会(カレル・ノヴォトニー氏)	立命館大学	2013年7月	30名程度	なし
6	間文化現象学講演会(ディディエ・フランク氏)	立命館大学	2013年12月	40名程度	なし

5. その他研究活動(報道発表や講演会等)

No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間
1	谷徹	(講演) フッサール「イデー」を読む	立命館大学 土曜講座	2013年9月
2	北尾宏之	(講演) カント「道徳形而上学の基礎づけ」を読む	立命館大学 土曜講座	2013年9月
3	谷徹	(書評) 酒井潔・佐々木能章・長網啓典編『ライブニッツ読本』	『週刊読書人』	2013年5月
4	亀井大輔・横田祐美子	(翻訳) 駆け足——ジャック・デリダにおける脱構築と政治の速度	『人文学報』首都大学東京人文科学研究科 469,	2014年3月
5	神田大輔・	(翻訳) レヴィニストロースとメルロ＝ポンティ	『多極化する現象学の世代組織形成と連動』	2013年6月

	佐藤勇一	—自然と文化の区別から生の精神へ、そして両者の間文化的な含意	した「間文化現象学」の研究 研究成果報告書 (2011-2012年度)』	
6	小林琢自	(翻訳) 純粋法学の将来の課題 (後半)	立命館大学人文科学研究所『立命館大学人文科学研究所紀要』, 第104号	2014年3月

6. 受賞学術賞					
No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月
1					

7. 科学研究費助成事業						
No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1						

8. 競争的資金等(科研費を除く)						
No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割
1						

9. 知的財産権								
No.	氏名	名称	出願人区分	発明人区分	出願番号	公開番号	登録(特許)番号	国
1								

以上。